

太平歲月奉春王、百里行程不裹糧、兒戲何人寓深意、葵心都向九陽光。楚詞注、湯谷上有扶木、九日居上枝、一日居下枝。

〔嬉遊笑覽四〕おで、こ、雙六は、正徳ごろの物なるを、上りの處、おで、こは、後に古板へ入木といふ事をしてかへたる故、畫のさま異なり。

〔嬉遊笑覽六〕おで、こは、で、こ云ことに、おもじを添ていひたる也、で、こは、で、くのぼうなり。
○中 略 其内一種おで、こといふ人形あり、古き繪雙六にみゆ。

〔好問堂記三〕おで、こ雙六年代考 按するに、此雙六は、正徳享保の頃のものなるべき歟、此中に團十郎もぐさと云あり、今淺草東本願寺の門前に、この艾を鬻家ありて、其店の招牌に、此雙六にある所の畫にひとしき艾賣の人形を出し置り、むかし此艾うり始の頃、ひろめの爲、俳優の名家市川團十郎なるもの二代目團十郎、幼名九藏、後に改て海老藏と云、實永六年己丑の秋、傾城雲雀山といへる狂言に、久米八郎の役、艾賣の姿にて、艾盡しのせりふありし事、其家口牌に傳ふ、是團十郎艾の權輿なりといへりとぞ申けりとある下に、角前髪の人物上下を著し、手に三絃を携へたる圖あり、按に當時の物貫なるべき歟、予先年ある人の家にして、英一蝶の戲畫にかける人物の圖あるを見たり、仍て考ふるに、一蝶其先多賀朝湖と云、實永六年謫居より歸りて後、名を英一蝶と改むるとぞ、然れば此畫も實永以降のものにして、團十郎もぐさと時代を等うすべし、故に此雙六を正徳享保の頃のものなりといへり。

文化乙丑初冬

江戸 莞齋藏

右はおで、こ雙六を、さる處にて再板せる時の上袋に記しありし文なり、莞齋何人といふ事を去らす。

〔還魂紙料上〕淨土雙六附治良雙六、治良紋楊枝、道中雙六、

貞享元祿の書目錄に、淨土雙六、同懷中道中雙六、野良雙六、とならべ出せり。○中 略 野良雙六は延寶